五音　上

当道音曲の事、和州・江州、又田楽節、此口口口口不可出。先、和州にをいて、申楽の芸人多しと云ども、亡父観世節を以て、当流庭訓とせり。江州は、犬王が曲なり。田楽節は亀阿弥、是又一流也。此達人共は、昔の道に成て、今は、古体の音声、伝伝して世に残れり。其後、堪能其物絶えて、師家なくなりしより、江州にも、田楽にも、能を作書する者絶えて、形のごとく、当流に、亡父の一流を相具して、此道を誌て、以三道種・作・書を伝え、芸能を習道して、当道を守るゆえに、斯曲をのづから広まりて、応永年来より以来、当世の遊曲となれり。

然といえども、音曲を万人もてあそぶばかりにて、曲舞・只謡の音声の性位の分目をもる人なく、まして、祝言・亡臆の声懸の変り目も分明ならねば、しばらく、曲道を五ヶ条に分ちて、祝言・幽曲・恋慕・哀傷・闌曲と定て、五音と名付。是は、音曲習道の目安として、五音の曲味を能能念ろうして、習道あるべきものなり。

　然ば、近年あまねく耳なれし歌・曲舞の数数、又、先達の古曲、少少大概記す所也。能能見分て、稽古有べし。

一、祝言　安全音と名付。安く全き内、恋曲あり。

春日野に若菜摘みつつ万代を祝ふ心は神ぞ知るらん　安全姿歟。

伏見　　亡父曲付

指声　夫久方の神代より、天地開けし国のはじめ、天のしほこの直なれや、名も二柱の神爰に、八島の国を作をき、すべら世なれや大君の、御影のどけき時とかや、

　あほによし、ならの葉守の神心、ならの葉守の神心。

足引山

指声　足引の山下水も絶えず、浜の真砂の数積もりぬれば、今は飛鳥川瀬になる恨みも聞えず、さざれ石の岩ほとなる悦のみぞあるべき、然ば天に浮かめる浪の一滴の露より起り、山河草木恵みに富みて、国土安静の当代なり。

千代木の風も静かにて、朝暮の雲も収まれり。

上　いざここに、わが代は経なん菅原や、わが代は経なん菅原や、伏見の里は久方の、天照らす日も影広き、瑞穂の国は豊かにて、民の心も勇みある、御代の治めはありがたや、御代の治めはありがたや。

松が崎　　十郎元雅曲

さし　寂寞たる深谷、重畳たる岩間づたひを　是を略す

上哥　山陰の、茂みを分る藪里に、茂みを分る藪里に、知られぬ梅の匂ひ来て、あらしぞしるべ松が崎、千代の声のみのどかにて、なを十返りの末遠き、御代の春こそ久しけれ、御代の春こそ久しけれ。

淡路　　　亡父曲　節舞

上　夫天地かいびやくの初めといつぱ、渾沌未分やうやく分かれて　是を略す

　さし・曲舞

上　天下を保ち給ふ事、すべて八十三万、六千七百余歳也。かかるめでたき王子たちに、御代をゆづり葉の権現と、あらはれおはします、いざなぎいざなみの御代も、ただ今の国土なるべし。

　是は、祝言乄闌曲・幽曲声味有。能能念籠可有。

富士山　節曲舞

序上　抑此富士山と申は、月氏七だう第三、天竺より飛びきたるゆへに、すなはち新山と云と也。　是を略

さし・曲舞あり

上　御門その後かぐや姫の、教へにまかせつつ、富士の嶺の上にして、不死の薬を焼き給へば、煙ははんてんに立のぼりて、うんかぎやくふうに薫じつつ、日月星宿もすなはち、あらぬ光をなすとかや、さてこそもろこしの方士も、この山に登り不死薬を、求め得て帰るなれ、これわが朝の名のみかは、西天唐土扶桑にも、並ぶ山なしと名を得たる、富士山のよそおい、まことに上なかりけり。

是は、闌曲之節体なれども、和曲の音聞よろしく、文言は祝言たるによて也。安全音に闌曲之声味有事、習有。

此外、四季祝言有

一、幽曲　是は、安全音を和らげて、美しく、曲をかかりにして、節を埋む由なるべし。寵花匂之曲と申べき。

　　　　　又や見ん交野の御野の桜がり花の雪散る春の明ぼの　　幽曲之姿か。

幽曲之内にも浅深可有。

吉野山　付、節曲舞　元雅曲

指声　いにしえのかしこき人の遊びけん　略

上　雪とのみ、誤たれゆく白雲の、誤たれゆく白雲の、絶え絶えかかる山の端の、上に霞のひま見えて、ほのぼのと明くる夜の、金の御岳の春の空。げにや時も春、所も花の名にし負ふ、吉野の山はたぐゐなや、吉野の山はたぐゐなや。

敷島

それ敷島の国つわざは　略

須磨　付源氏

指　是は津の国すまの浦に　略

静　亡父曲

次第　花の跡訪う松風は、花の跡訪う松風は、雪にや静かなるらん　略

　　桜川

是に出たる物狂の

　　通小町

指忝き御譬なれ共、悉多太子は

　　井筒

さなきだに

松風　　亡父曲

心づくしの秋風に

融

陸奥はいづくはあれど塩釜の

　　葵の上

一声　三の車に法の道

　　箱崎

一声　箱崎の松の葉守の神風に

汐汲　　亀阿曲

指　われ汐を弄する身にあらずは

　　盛久　　元雅曲

指　なむや大慈大悲の

　　蘇武

それ遠く異朝を引いて見るに、漢の御門の御時

　　宇治山　金剛曲

せうわうほうしふわうのせいとく

布留

初深雪布留の高橋見渡せば　　亡父作書

　　恋の重荷

それ及びがたきは高き山

　　班女

げにや祈りつつ

六月祓

げにや数ならぬ

　　花形見

われ応神天皇の

松風　後の段

げにや思ひ内にあれば

　　難波

或は男山の

錦木

陸奥の信夫

　王昭君　　金春曲

是はもろこし合甫の里に

　　盲打　亡父曲

くどき　梓の弓の

　　松浦　　福来曲

生国は筑紫肥前

　　哀傷

一生は風の前の雲

　　江口遊女　　亡父曲

それ十二因縁の

　　弱法師　　元雅曲

それ鴛鴦の衾の下には

　　女郎花　　亀阿曲

をみなへしは女郎花と書きたれば

　　当麻

ありがたや

隅田川　　元雅曲

人の親の心は

　　春永

それ生死に

　　求塚　　亡父曲

されば人、一日一夜を経るとだに

　　舟橋

往時渺茫として

　　禿高野　　亀阿曲

花は散つて根にあれど

　　橋立

それ親の子を思うこと

　　鵺

指　悲しきかなや

　　鵜飼

げにや世中の

　　千寿

さても本三位の中将

　　忠度

はづかしや亡き跡に

　高野　　亡父曲

聞きしに越えて

五音　下

一、闌曲　是は、各別の曲聞也。異上して、なにとも歌性位也。大かたは、曲付のままにて具行もあるべし。真実はひとり音曲也。そのゆえは、当座の気伝によりてなにとも謡う位なり。祝・幽・恋・哀の四音に離れて、又四音にわたる曲道あり。口伝あり深秘。是、既師家の位成べし。論語云、「中庸之為徳也、其主矣乎」。

　　　ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれ行船をしぞ思ふ　闌曲の姿歟。

　　自然居士　　亡父曲

指声　夫一代の教法は、五時八教をつくり、教内教外を分かたれたり、只声也。此声位無上大事有五時といつぱ華厳阿含方等般若法華涅槃、四教とは是蔵通別円たり、釈迦教主の秘蔵を受け、五ざうさうじんのむねを開きしよりこのかた、誰か仏法を崇敬せざらん。

只詞　われはもと隠遁国の民なり、此内に法界舎と云家あり、禁戒を垣として悪しき友をば近づけず、さればかく身を捨て果てば、静かなるを友とし、貧を楽とすべき、隠遁のすみか、禅観の窓こそ望む所なれども。ただし山に入てもなを心の水のみなかみは求めがたう、市にまじはりても、をなじ流れの水ならば真如の月などか澄まざらん。

只詞　かやうに思ひしより自然心得、今は山深きすみかを出、かかる物狂となり。

哥　花洛の塵にまじわり、花洛の塵にまじわり、かくかの波に裳裾をぬらし、万民にをもてをさらすも恨みならず、ほうのためなれば身を捨つる。ふく風の寒き山とて入月に、指をさしてもとめがたきは、つながぬ月日なりけりや、つながぬ月日なりけりや。

葛の袴　　亡父曲　作書但眼

指声　神勅にしたがいて知顕集を開けば、なになにかの内大臣経信の卿、過にし九月十三日に、住吉に詣で候。伊勢物語の不審を教えて賜べと志たまいしに、今日は名にをう秋の二夜なれば、海の面漫漫と明らかにして、松の風磯辺の波を語らうなれば、心空にあこがれて。

下哥　四所明神を巡礼し、釣殿に出て、月を眺むる所に、ここに怪しかる老翁、忽然と出きたり。その姿を見るに、霜雪かしらに重なて、鬢髪に黒き筋なし、波浪額にたたんで、面貌しきりに皺めり、高眶とまかぶら高に、醜陋にしてみにくく、白き水干の、古く赤み果てたるに、名風の見聞在之也葛の袴のここかしこ破れ損じたりけるに、錆色の立烏帽子を耳の際に引き入、うそぶき月に向かえば、せいしつのゆうゆうたるをあけては、きちべうにはれ、てうゐのかんかんたるをくだきて、うんてんはんにをさまる。尉に是を怪しめて、この物語の不審を、少少尋ぬれば、此翁歯もなき口を広らかに打ち笑みて。

上　いさとよ対面のはじめに、いせものがたりの不審を、くれぐれと語らんは、かつうはそら恐ろしや、かつうは道の聊爾なりとて、左右なく言はざりけりとや。いざや伊勢の神垣、越えけん跡を尋ねん。

論義　秘する所の言の葉は、秘する所の言の葉は、数数なりと申とも、ことに憚り多きは、馴れにし人の名字なり、〽そも名字のしみとは、なに事を申たりけるぞ、〽数数ありしその中に、取り分き十二人なり、〽十二人も三人も、われは全く知らぬなり、第一番はたれやらん、〽あだなりと、名にこそ立てれさくら花、〽としにまれなる人も待ちけり、〽此歌の主をば、人待つ女と書きたりしを、〽紀のありつねがむすめと名論儀、あらわすは尉が僻事。〽さて其後は逢坂の、関の関屋の真木柱、〽立つ名もくやし、思ひくちなんと、恋死に死せしをば。〽物病みの女とかきたりしを、〽大内言、長谷雄の卿のむすめと、あらはす尉が僻言か。

同　げにや住吉の、松の老木の口がましや、物言いしける翁なり、なをも長居せん、筋なきことや夕暮の、月もろともに住吉の、松の葉杖にすがりて、津守の浦に帰りけり、津守の浦に帰りけり。

野守

指声　是に出たる老人は、この春日野に年を経て、山にも通ひ里にも行、野守の翁にて候也。ありがたや慈悲万行の春の色、三笠の山にのどかにて、五重唯識の秋の風、春日の里にをとづれて、まことに誓ひも直なるや、神の宮路に行き帰り、運ぶ歩みも老の、さかゆく御影頼むなり。

下哥　唐土までも聞えある、此宮寺の名ぞ高き。

上　むかし仲丸が、むかし仲丸が、わが日の本を思ひやり、天の原、ふりさけ見ると詠めけん、三笠の山かげの月かも。それは明州の月なれや、ここは奈良の都の、春日のどけき気色哉、春日のどけき気色哉。

弱法師節曲舞

上序　夫仏日西天の雲に隠れ、慈尊の出世まだはるか、三会のあかつき未だなり。

指声　然るにこの中間にをいて、なにと心を延ばえまし。ここによつて上宮太子、国家をあらため万民をしえて、仏法流布の世となして、あまねき恵みを弘め給う。すなわち当寺を御建立あつて、はじめて僧尼の姿をあらはし、四天王寺と名付給う。

曲舞　金堂の御本尊は、女意輪の仏像、救世観音とも申とか、太子の御前生、四だん国の思禅師にて、わたらせ給ゆへ、出仮の仏像に応じつつ、今日域に至るまで、仏法さい初の御本尊と、現はれ給ふ御威光の、まことなるかなや、末世相応の御誓ひ。しかれば当寺の仏閣の、御作品品も、赤栴檀の霊木にて、塔婆の金宝に至るまで、閻浮檀金なるとかや。　上　万代に澄める亀井水までも、水上清し西天の、無熱の池水を受けつぎて、ながれ久しき代代までも、五濁の人間を導きて、さいどの舟をも寄するなる、難波の寺の鐘の声、異浦浦に響き来て、あまねき誓ひ満ち汐の、をし照る海山も、皆成仏の姿也。

歌占　　元雅曲

指声　是は伊勢の国二見の浦の神子にて侯。それ歌は天地開け初まりしより、陰陽の二神、天の巷に行合の、小夜の手枕結び定めし、世を守り国を治めて、今も絶えせぬ妙文なり。

下哥　占問はせ給へや、歌占問はせ給へや。

上　神風や、伊勢の浜荻名を変へて、伊勢の浜荻名を変へて、葦といふも芦と云も、同じ草なりと聞く物を、所は伊勢の神子なりと、なにはのことも問ひ給へ。人心、引けば引かるる梓弓、伊勢や日向の、ことも問ひ給へ、日向のことも問ひ給へ。

蟻通

指声　瀟湘の夜の雨しきりに降つて、遠寺の鐘の声もきこえず、なにとなく宮寺なんどは、深夜の鐘の声、御燈の光などに社嵐吹遠山本のむらかしは誰が軒端より雪はらふらん、神さび心も澄みわたるに、しやとうを見れば燈し火もなく、すずしめの声も聞えず、神は宜禰が慣らはしとこそ申に、宮守ひとりも見えぬことよ。よしよし御燈は暗くとも、和光の影はよも曇らじ、あら無沙汰の宮守どもや。

下　雨雲の、立重なれる夜半なれば、ありとほしとも思ふべきかはと、あら面白の御歌や。

下哥　をよそ歌には六義あり、これ六道の、巷に定め置いて、六の色を見するなり。

上　されば和歌の事態は、されば和歌の事態は、神代よりも始まり、いま人倫にあまねし、たれかこれを褒めざらん。中にも貫之は、御書所をうけたまはりて、いにしへ今までの、歌の品を選びて、喜びを延べし君が代の、直なる道をあらはせり。

下　およそ思つて見れば、歌の心すなほなるは、これ以て私なし、人代に及んで、はなはだ興る風俗の、長歌短歌旋頭、混本の類ひ是なり、雑体一にあらざれば、げむりうやうやく茂る木の、花のうちの鶯、又秋の蟬の吟の声、いづれか和歌の数ならぬ。されば今の歌、わが邪をなさざれば、などかは神も憐みの、心を受くる宮人は。　上　かかる奇特に逢坂の、関の清水に影見ゆる、月毛の此駒を、引き立て見ればふしぎやな、もとのごとくに歩みゆく、ゑつてう南枝に巣をかけ、胡馬北風に嘶へたり。歌に和らぐ神心、たれか神慮の、まことを仰がざるべき。

実盛

指声　笙歌はるかに聞ゆ孤雲の上、聖衆来迎す落日の前、あらありがたや今日も又紫雲の立ぞや。鐘の音念仏の声聞え候、さだめて聴聞の貴賤群集なるらん。さなきだに立ち居苦しき老の波の、寄りもつかずは聴衆の庭に、よそながらもや聴聞せん、一念称名の声のうちには、摂取の光明曇らねども、老眼の通路なを以て明らかならず。よしよし少しは遅くとも、ここを去る事遠かるまじや、南無阿弥陀仏。

〽いかに尉殿、この程聴聞に参り侯へども、御身の姿を見る人なし、誰に向かひて言葉を交はすぞと皆人申合へり、いかなる人ぞ名乗給へ。是は思ひも寄らぬことを承侯物かな、もとより所は天離がる、鄙人なれば人がましく、名もあらばこそ名のりもせめ、ただ聖人の御下向、すなはち弥陀の来迎なれば、かしこうぞ長生きして、此称名の時節に逢ふ事、盲亀の浮木優曇華の、花待ち得たる心地して、老のさいはい身に越え、喜びの涙袂に余る、されば身ながら安楽国に生まるるかと、無比の歓喜をなすところに、輪回妄執の閻浮の名を、又あらためて名のらん事、口惜しくこそ候へとよ。

哥　篠原の、草葉の霜の翁さび、草葉の霜の翁さび、人な咎めそかりそめに、あらはれいでたる実盛が、名をよそに知らせんは、亡き世語りもはづかしとて、御前を立ち去りて、行くかと見れば篠原の、池のほとりにて姿は、幻となりて失せにけり、幻となりて失せにけり。

　　　高野節曲舞　　元雅曲

上序　そもそも此たかのさんと申は、平城を去て二百里、郷里を離れて無人声。

指声　然ば末世の隠所として、結界清浄の道場たり。中にもこの三鈷の松は、大同二年の御帰朝以前に、わが法成就円満の地の、印に残り留まれとて、三鈷を投げさせ給ひしに、光とともに飛来り、この松が枝の木末に留まる。しかれば諸木の中にも分て、松に留まるその例、千代万代の末かけて、久しかれとの御方便、くはしく旧記にあらはれたり。

節曲舞　さればにや、しん如平等の松風は、八葉の峰を、静かに吹ぎ渡り、法性随縁の月の影は、八つの谷に曇らずして、まことに三会の、あかつきを待つ心也。しかれば即身、成仏の相をあらはし、入定の地を示しつつ、しんしんたる奥の院、深山烏の声寂びて、飛花落葉の嵐風まで、無常観念のよそほひ、是とても又常住の、皆令仏道、円覚の相をあらはせり。　上　しかれば、時移り事去るや、四季おりおりのをのづから、光陰惜しむべし、時人を待たざるに、貴賤のくんじゆの雲霞、かかる高野の山深み、谷峰の、風常楽の夢さめ、法の称名妙音の、心耳に残り満ち満ちて、唱へ行う聞法の、声は高野にて、静かなる霊地なるべし。

　　　当麻

上序　そもそも此たえまのまんだらと申は、仁王四十七代の御門、はいたい天皇の御宇かとよ、横萩の右大臣豊成と申し人。　　　‘

指声　其御息女中将姫、この山に籠り給ひつつ、称讃浄土教、毎日読誦し給ひしが、心中に誓ひ給ふやう、願はくは生身の弥陀来迎あて、われに拝まれおはしませと、一心不乱に観念し給ふ。しからずは畢命を期として、この草庵を出でじと誓つて、一向に念仏三昧の定に入り給ふ。

節曲舞　所は山蔭の、松吹風も涼しくて、さながら夏を忘れ水の、音も絶え絶えの、心耳を澄ます夜もすがら、せう名、観念の床の上、坐禅、円月の窓の内、寥寥とある折節に、一人の老人の、忽然と来り佇めり。是はいかなる人やらんと、尋ねさせ給ひしに、老尼答えてのたまはく、誰とはなどや愚か也、呼べばこそ来りたれと、仰せられけるほどに、中将姫はあきれつつ。　上　われはたれをか呼子鳥、たつきも知らぬ山中に、声立つることとては、なむ阿みだぶの称へならで、又他事もなきものをと、答えさせ給しに、それこそ我が名なれ、声を知るべに来れりと、のたまへば姫君も、さては此願成就して、生身の弥陀如来、げにらいかうの時節よと、感涙肝に銘じつつ、綺羅衣の御袖も、しほるばかりに見え給ふ。

熱田　　亀阿曲

指声　抑当社と申は、景行第三の王子、御名は大和武の尊、地神五代には、天照太神の御弟、すさの男の尊、出雲の国に跡を垂れ、しばらく宮居し給へり。　サシ　ここに簸の川上に、ていとくする声あり、みこと至りて見給へば、老人父毋が中に、少女を抱きて泣き居たり、是はいかにと尋ぬれば。

節曲舞　老人答え申やう、我は手名椎足名椎、女を稲田姫と、云ものにて候が、大蛇の生贄を、悲しむなりと申せば、しからば其姫を、我に得させよその難を、逃すべしとのたまへば、喜悦の心妙にして、尊に姫を奉る。　上　やがて大蛇を従へ、その尾にありし剣を、叢雲のけんと名付しこそ、八剣の宮の御事よ。されば簸上の明神は、其時のいなだ姫也、父の老翁手名椎は、源太夫の神とあらはれ、東海道の旅宿を、守らんと誓ひ給へり。

竹取り歌　　同曲者

次第　あるに甲斐なき世中を、あるに甲斐なき世中を、古畑打つす悲しき。

哥　ゑのこ草、種まくほどもなかりしに、種まくほどもなかりしに、あはのなるとの一あひを、よくよくこれを引き捨てて、蒸せる粟ににたるは、女郎花と云草、薄苅萓吾木香、蓬をことに引き捨ててよ、もとの古根や残るらん、もとの古根や残るらん。

同曲者

指声　抑むかし曠劫よりこのかた、五道六道に廻る事は、なにのゆへぞや、由なき妄執に引かれ、本来空道を忘て、生死の海に浮沈せり、さていつまでの心ぞや。

下哥　まだ夜を籠めて煩悩の、離れ難き家を出で。

上　菩提を誘ふ横雲の、菩提を誘ふ横雲の、引くより後の舟呼ばひ、我が乗る舟は行共、真の岸はとうせじ。げにや心から、浮きたる舟に乗初めて、一日も浪に濡れぬ日の、なき世の旅はいつまでぞ、なき世の旅はいつまでぞ。

西行歌

指声　それ春の花は上求本来の梢に現はれ、秋の月は下化冥闇の水に宿れり。たれか知る行水に三伏の夏もなく、澗底の松の風、一声の秋を催すこと、草木国土をのづから、見仏聞法の結縁たり。

下哥　教え置く、その品品の法の門。

上哥　開くる道はひとつぞと、開くる道はひとつぞと、知るや心の水清き、御法の舟なれば、行ことやすき彼の岸に、至り至りて暗からぬ、二世安楽は有難や、二世安楽は有難や。

伏見の翁歌

上序　抑伏見の翁の事、名も久方の天照らす、神の代継ぎの末ひさに、君道を守る誓ひあり。

サシ　しかるに仁王代代を経て、時雨降り置ける楢の葉の、名に負ふ宮路正しくて、うつりつづくや雲の上、花の都の春の空、平安城におさまれり。中にも伏見の宮所、国家を守る神心、知るや阿古根の浦までも、四海のはらは静か也。

節曲舞　仁王五十代、桓武天王の御宇かとよ、当国伏し見ての、里に移らせ給ひて、大宮造り始めつつ、皇居を定め給ひしに、伏見の翁は現はれて、いざここに、我が世は経なん菅原や、伏見の里の、荒れまくも惜しと、詠めけるとかや。其後、巫に託しつつ、なをかさねてのみことのり、我は神風や、伊勢の阿古根の浦の波、治まる御代の例ならん、伏見に見そなはして、君辺に住むべしとの、御神勅に任せつつ、大宮造りし給へり。　上　抑ふしみといふことは、まづ我朝の惣名にて、伊弉諾伊弉冊の、あまの岩くらの苔筵に、ふして見てし国なれば、ふしみと名付給ふ也。さればにや、国富み民豊かにて、たれも我が代に合竹の、伏見の里を、守らんの御誓ひ、百王万歳に、平の都なるべし。

若君永享六二月九日御たんじやうの時より歌いかえたること葉所所あり

太子くせ舞　　亡父曲

　　　　　是は昔太子伝節曲舞内也。作者不知人

指声　我朝にその威光をひろめ、漢家にその名をあらはしたまいしは、上宮太子にておはします。彼欽明天王三十二、一月一日の夜半に御夢想の告あり、金色の僧童男来り給いて、后に告げてのたまはく、われに救世の願あり、すなわち后の御胎内に、宿るべしとありしかば。

曲舞　后答えてのたまはく、妾が胎内は垢穢なり、いかで尊き御体を、宿し給わんとありしかば、僧童男重てのたまはく、我は垢穢を厭はず、ただ望むらくは人間に、着到せんが為也、后辞するに所なし、ともかくもと有しかば、この僧大きに喜んで后の玉殿に、光御なると御覧じて、后の御ロに、飛入給うと御覧じて、暁月軒にかたぶきかかやき、松風夢をやぶりをさめて、五更の天も明けにけり。御門この由聞こし召し、悦の色をなし給ふ、后かならずしやうらんを、うけ給うべしとありしかば。　上　隙行く駒をつながねば、大ばつ大河の池の水、すまでにごれる心地して、十二月と申には、南殿の御馬屋にて、御さんへいあん、王子御誕生なる、馬やどの王子と申も、上宮太子の御事。

　　　　飛火

只詞　抑当社と申は忝も、神護景雲二年に、河内国枚岡より、此春日山本宮の峰に移らせ給ふ。さればこの山、もとは端山の陰浅く、木陰ひとつもなかりしを、蔭頼まんと藤原や、氏人寄りて植へし木の、もとより恵み深ければ、程なくかやうに深山となる。されば当社の御誓ひにも、人の山詣はかへすがへす嬉しけれども、木の葉の一葉も裳裾に付けてや去りぬべきと、惜しみ給もなにゆへぞ、人の煩い繁き木の、蔭深かれと今もみな、諸願成就を植へ置くなり。

指声　されば慈悲万行の日の影は、三笠の山にのどかなり、五重唯識の月の光は、春日の里に隈もなし。

下哥　蔭頼みおはしませ、ただかりそめに植ふるとも、草木国土成仏の、神木と思し召し、あだにな思ひ給ひそ。

上　あらかねのそのはじめ、あらかねのそのはじめ、治まる国は久方の、あめははこぎの緑より、花ひらけ香残りて、仏法流布の種久し。昔は霊鷲山にして、妙法華経を説き給ひ、今は衆生を度せんとて、大明神と現はれ、此山に住み給へば、鷲の高嶺とも、三笠の山を御覧ぜよ。さて菩提樹の木陰とも、盛りなる藤咲きて、松にも花を春日山、のどけき影は霊山の、浄土の春に劣らめや、浄土の春に劣らめや。

雪山

指声　有難や位髙う恵み厚うして、降るや深雪の年を積む、大内山の道直に、越え来る年のはるかけて、寒風も残る雪のうちに、越路を移す雲井の庭、みな白妙の明ぼのの山、あら面白の気色やな。

論義　〽げにげにあまりに面白き、折に引かれて我ながら、われにもあらぬ心空に、〽うそぶく月の影ともに、〽積もる雪山　〽雲の御笠、〽花の梅壺、〽御河の波、同音　よるの気色の面白さよ、古人の言葉こそ、思ひ出でられて侯へ。あかつき梁王の苑に入て雪群山に満ち、夜庾公が楼に登れば、月千里に明らか也。

上哥　曇りなやこの御代の、曇りなやこの御代の、豊の明りの初めより、千代木の風も収まり、雪ほうねんに深かりき、をもしろの雪山や。春ごとに、君を祝いて若菜摘む、わが衣手に降る雪は、払はじ払はで、そのままに受くる袖の雪、はこび重ねゆき山を、千代に降れと作らん、雪山を千代と作らん。

李夫人　　亡父曲

指声　かたじけなき御たとえなれどもいかなれば漢王は、李夫人の御別れを嘆き給て、朝まつりごと神さびて、夜の大殿もいたづらに、ただ思ひの涙御衣の袂を濡らす。又李夫人は好色の、花のよそほひ衰へて、しほるる露の床の上、塵の鏡の影を恥ぢて、つゐに御門に見え給はずして去り給。

節曲舞　御門深く嘆きて、其御かたちを、甘泉殿の壁に写し、われも画図に立添ひて、明け暮れ嘆き給けり。されどもなかなか、御思ひはまされども、物言ひ交はすことなきを、深く嘆き給へば、李少と申太子の、いとけなくましますが、武帝に奏し給やう。　上　李夫人はもとはこれ、じやう界の辟妾、くわすい国の仙女也。一旦人間に、むまるるとは申せども、つゐにもとの、仙宮に帰りぬ、泰山府君に申さく、りふじんの面影を、しばらくここに、招くべしとて、九華帳の内にして、香を焚き給。夜ふけ人静まり、風すさまじく、月秋なるに、それと思ふ面影の、あるかなきかにかげろへば、なをいや増しの思ひ草、葉末に結ぶ白露の、手にも溜まらで程もなく、ただいたづらに消えぬれば、へうべう悠悠としては、又尋ぬべき方なし。　上　悲しさのあまりに、りふじんの住み慣れし、甘泉殿を立去らず、空しき床を打払ひ、故き衾旧き枕、ひとり袂を片敷けり。

凡、五音曲道の条条、已上。此外の音曲、於古体・当世、其数数、皆書不及。然共、他是順て、能能知分可有也。

一、音曲習道の次第次第、文字読みより、節を能能極め尽くして、さて曲を磨きて、さて歌の詰め開きを心得て、音声の性位ことごとく成就して、さて謡う当座の音聞清曲成事を可知。音聞澄まずば、成就不可有。如此の条条を咸く曲得して、安全音になる位を、声懸とは云也。返返、音聞澄まずばかしがましかるべし。たとへば水月の濁るがごとくなるべし。凡、習道の程は節を体にして、習道終りて後はかかりを体にすべし。曲とは此内有。

一、節曲舞道の事、只歌には別音也。五音の内の曲舞は、他分、只歌の声懸也。昔、白鬚の曲舞を、亡父申楽に舞出したりしより、当道の音曲共なれり。然ば、白鬚・由良湊・地獄、是は、申楽の内ながら、押し出したる道の曲舞のごとくなる也。又、海道下・西国下、玉林の作書として、南阿・観世亡父曲付せられし也。此曲舞共も、道の曲舞よりは和らぎたる曲分也。

道の曲舞と申は、上道・下道・西岳・天竺・賀歌女也。乙鶴、此流を亡父は習道ありし也。賀歌は、南都に百万と云女節曲舞の末と云。今は、皆皆、曲舞の舞手人体絶えて、女曲舞の賀歌が末流ならでは不残。祇園の会の車の上曲舞、この家なり。

白鬚曲舞　　亡父曲付　闌曲也　亡父作書

上　夫此国の起り家家に伝うる所、おのおの別にして、其説まちまちなりといへども、しばらく記する所の一義によらば、天地すでに分かれて後、第九の減劫、人寿二万歳の時。かせう世尊西天に出世し給ふ時に、大聖釈尊、その授記を得て、兜率天に住し給しが。

指声　我八相成道の後、遺教流布の地いづれの所にかあるべきとて、この南瞻部洲をあまねく飛行して御覧じけるに、漫漫とある大海の上に、一切衆生、悉有仏性如来、常住無有変易の浪の声、一葉の芦に凝り固まって、一の島となる、今の大宮権現の波止土濃也。

節曲舞　其のち人寿、百歳の時、悉達と生まれ給て、八十年の春の比、頭北面西右脇臥、跋提の波と消え給。されども仏は、常住不滅法界の、妙体なれば昔、芦の葉の島となりし、中つ国を御覧ずるに、時はうがや、ふきあはせずの、尊の御代なれば、仏法の名字を、人知らず。ここに比叡山の麓、さざなみや、志賀の浦のほとりに、釣を垂るる老人あり、尺尊かれに向て、翁もし、此地の主たらば、此山を我に与へよ、仏法結界の、地となすべしとのたまへば、おきな答へて申やう、我人寿、六千歳のはじめより、此山の主として、この水海の七どまで、芦原なりしをも、まさに見たりし翁也、ただしこの地、結界となるならば、釣する所失せぬべしと、惜しみ申せば、釈尊力なく、今は寂光土に、帰らんとし給へば。　時に東方より、浄るりせかいの主薬師、こつぜんと出で給ひて、よきかなや、釈尊この地に、仏法をひろめ、給はん事よ、我人寿二万歳のはじめより、此所の主たれど、老翁いまだ我を知らず、なんぞこの山を、惜しみ申べきはや、開闢し給へ、我も此山の主となて、ともに五五百歳の、仏法を守るべしと、かたく契約し給て、二仏、東西に去り給、その時の翁も、今の白鬚の神とかや。

　　　由良湊節曲舞　　同曲付　幽曲

　　　　　　　　　　　　　凡、節曲舞の幽曲の懸是初也。亡父作書

上　凡人間の八苦の中に、愛別離苦ぐふどつくといふことは、さのみはよもと思ひしに、わが身のうへになりてこそ、悲しきことは知られたれ。

指声　いにしへ人にあひ慣れて、偕老同穴浅からず、同じ契と思ひしに、人の心の花かとよ、葛城山の嶺の雲、よそに通ふと聞きしかば、ひとり心は住吉の、ねたくも人に待つと言はれじと包みしに、男山の女郎花の、くねる心にあくがれ出て、涙の雨の古里を、足にまかせて立出づる。

節曲舞　由良の湊の泊り舟、和泉の国に着きしかば、信太の森の葛の葉の、しばし待たんと思へども、我には人の帰らず、訪はれし頃は待ち慣れし、夕の堺の鐘を聞く、難波の寺に参れば、かの国に、生まるる心地して、西を遙かに伏し拝み、入江の芦の仮の世に、いつまで物を思ふべき。濃き墨染めに様変へて、誠の道に入らばやと、思ひ長柄の橋柱、千度まで悔しきは、捨ざりし身のいにしへ。過ぎにし方の旅衣、春も半ばになりしかば、花の都に上りて、清水寺に参れば。　上　大慈大悲の日の光、えんえんとある地主の桜、まことに権現の誓ひかや、花のあたりは心して、松には風の音羽山、音に聞きしよりもなをまさり、尊き面白さに、下向の道も覚えず。かくて夜に入れば、まどろむ隙もなくして、御名を唱へてゐたりしに、同じ様に通夜して、近く寄り添ふ女あり。語らい寄りて申やう、痛はしやかたがたは、思ひありと見えたり、思し召す事あらば、心の内を語りて、御慰みもあれかしと、ねんごろに申せば、頼もしく思ひて、立寄る蔭もなき身也、様変へたきと申せば、痛はしき事かな、わが住む里にしばらく、足を休め給て、まことに様を変へ給はば、しかるべき尼寺に、引きつけ奉るべし、とくとくと誘はれて、身を浮草の根を絶えて、清水寺を立出て、なをも思ひを志賀の浦、大津とかやに下りぬ。

上　矢橋の浦の渡し舟、さしてそことも白波を、ぬす人とは思はで、東路さして売られ行、過ぎにし方も覚えず、行く末もなを遠江の、掛川の宿に年たけて、又越ゆべしと思ひきや、命なりけり、小夜の中山、なかなかに残る身ぞつらき。

地獄節曲舞　　南阿曲付　是は哀傷の声懸也

　　　　　　　　　　　　　　　　　作書山本百万能之内

上　昨日もいたづらに過ぎ今日むなしく暮なんとす、無常の虎の声肝に銘じ、せつせんの鳥鳴いて、思ひをいたましむ。

指声　一生はただ夢のごとし。たれか百年の齢を期せむ、万事はみな空し、いづれか常住の思ひをなさん。命は水上の泡、風にしたがつて廻るがごとし、魂は籠中の鳥の、開くを待ちて去るに同じ、消ゆる物は二たび見えず、去ものは重ねて来らず。

節曲舞　須臾に生滅し、刹那に離散す、恨めしきかなや、釈迦大士の慇懃の教を忘れ、悲しきかなや、閻魔法王の、苛責の言葉を聞く、名利身を助くれども、いまだ北邙の、煙をまぬかれず、恩ないに、心を悩ませども、たれか黄泉の、責めにしたがはざる。これがために馳走す、所得いくばくの利ぞや、これによて追求す、しよしや多罪也、しばらく目をふさいで、往事を思へば、旧遊みな亡ず、指を折て、古人のかぞふれば、親疎多くかくれぬ、時移り事去つて、今なんぞ、渺茫たらんや、人とどまり我ゆき、たれか又常ならん。

上　三界無安猶如火宅、天仙なをし死苦の身なり、いはんや下劣、ひんせんの報においてをや、などか其罪軽からん、死に苦しみを受け重ね、業に悲しみ名を添ふる。ざんすい地獄の苦しみは、臼中にて身を斬る事、せつたつして、地らきたり、一日の其うちに、万死万生也、剣樹地獄の苦しみは、手に剣の木をよづれば、はくせきれいらくす、足に刀山踏む時は、剣樹ともに解すとかや、石割地獄の苦しみは、りやうぐわいの、大石もろもろの、罪人を砕く、つぎの火盆地獄は、頭に火炎をいただけば、はくせきの骨頭より、炎炎たる火を出す。ある時は、焦熱大焦熱の、ほのほにむせびある時は、紅蓮大紅蓮の、氷に閉ぢられ、鉄杖頭を砕き、火燥足裏を焼く。　上　飢ゑては鉄丸を呑み、渇しては、銅汁を飲むとかや、地獄の苦しみは無量なり、餓鬼の苦しみも無辺なり、畜生修羅の悲しみは、われらにいかで勝るべき、身より出だせる咎なれば、心の鬼の身を責めて、かやうに苦をば受くるなり、月の夕べの浮き雲は、後の世の迷ひなるべし。

海道下　　南阿曲付　此くせ舞の幽は者は闌曲、是又毎毎幽曲にも亘。作書玉林

上　抑此もり久と申は、平家譜代の侍、武略の達者なりしかば、鎌倉殿まで知ろしめしたるつはものなり。

指声　これにて計らひがたしとて、関東に下しつかはさる、花の都を出でしより、音に鳴き初めし賀茂河や、すへ白河をうち渡り、粟田口にも着きしかば、今はたれをか松坂や、四の宮河原四つの辻。

節曲舞　関の山路のむらしぐれ、いとど袂や濡らすらん、知るも知らぬも逢坂の、嵐の風の音寒き、松本の宿に打出の浜、湖水に月の影落ちて、氷に波や立ぬらん、越と辞せし范蠡が、扁舟に棹を移す也、五湖の煙の波の上、かくやと思ひ知られたり。昔ながらの山里も、都の名をや残すらん、石山寺を拝めば、これ又救世の悲願の、世に超え給御誓ひ、頼もしくぞや覚ゆる、瀬田の唐橋影見へて、長虹波にただよへり、憂き世の中を秋草の、野路篠原の朝露、をき別れゆく旅の空、幾夜な夜なを重ぬべき。　上　露も時雨も守山は、下葉残らぬ初紅葉、夕日に色や増さるらん、いにしへ今を、鏡山、形をたれか忘るべき、勇む心はなけれ共、其名ばかりの武者の宿。まだ通ひ路も浅茅生の、小野の宿より見渡せば、斧斤を研ぎし磨針や、番場と音の聞えしは、この山松の夕嵐、旅の夢も醒井の、みづから結ぶ草枕、たれか宿をも柏原、月も稀なる山中の、不破の関屋の板庇、久しくならぬ旅にだに、都の方ぞ恋しき。垂井の宿を過ぎ行ば、青野が原は名のみして、みな夕霜の白妙、枯葉に洩るる草もなし、かかる憂き世に青墓や、捨てぬ心を杭瀬川、墨俣足近の渡りして、下津貝津打ち過ぎて、熱田の宮に参れば。　上　蓬莱宮は名のみして、けいりくに近き我身の、不死の薬やなかるらむ、あし間の風の鳴海潟、干汐につるる捨小船、ささで沖にや出ぬらん。

指声　ささがにの、蜘蛛手にかかる八橋の、沢辺に匂ふ杜若、在原の中将の、はるばる来ぬと詠ぜしも、わが身の上に知られたり。

節曲舞　なを行く末は白真弓、矢矧の宿赤坂、松に波立つ藤さはの、木末の花を宮路山、わたうど、今橋打ち過ぎ、雲と煙の二村、山は高師の名のみして、野里に道や続くらん。　上　浪の満ち干の潮見坂、れうかいてんに連なりて、雲に漕ぎ入、沖つ舟、呉楚東南にわかれて、乾坤日夜浮かめり、かへらんことも白須賀に、しばし下りゐる水鳥の、下安からぬ心かな。夕汐のぼる橋本の、浜松が枝の年年に、行春秋を送りけん、山は後の前沢、夜は明け方の遠山に、はや横雲の引馬より、天竜川も見えたり。衰へ果つる姿の、池田の宿鷺坂、旅寝とだにも慣れぬれば、夢も見付の国府とかや。岸辺に波を掛河、小夜の中山中中に、命の内は、しらくもの、又越ゆべしと思ひきや、憂き事のみを、菊川や、旅の疲れの駒場が原、変る淵瀬の大井川、川辺の松に言問はん。　上　花紫の藤枝の、いく春かけて匂ふらん、慣れにし旅の友だにも、心岡部の宿とかや。蔦の細道分け過て、着慣れ衣を宇都の山、現や夢と成ぬらん。みなとに近く引網の、手越の河の朝夕に、思ひを駿河の国府を過ぎ、清見が関の中中に、戸ざさぬ旅や憂かるらん、薩埵山より見渡せば、遠く出でたる三保が崎、海岸そことも白波の、松原越しに眺むれば、梢に寄する海士小舟、あまりに袖や濡らすらん、由比蒲原をも過ぎしかば、田子の浦回も近くなり。　上　西天唐土扶桑国、ならぶ山なき富士の嶺や、ばん天の雲を重ぬらん、浮島が原を過ぎ行けば、左は湖水波寄せて、凌波潜水の浮鳥の、上毛の霜を打払ふ。右は蒼海かすかにて、漁村の孤帆遙かなり、頓教智解衆生の、火宅の門を出初し、羊車鹿車大牛の、車返しはこれかとよ。　上　伊豆の国府にも着きしかば、南無や三島の明神、本地大つうちせう仏、過去塵点のごとくにて、くわうせん中有の旅の空、ぢやうあんみやうの巷までも、我らを照らし給へと、ふかく祈誓申ける、雪の古枝の枯れてだに、二たび花や咲くらん。

西国下　　亡父曲付　玉林作書

指声　寿永二年の秋の比、平家西海にをもむき給う、城南の離宮に至り、都を隔つる山崎や、関戸院に玉の御輿を舁き据へて、八幡の方を、ふし拝み、南無や八幡大菩薩、指声　人王はじまり給ひて、十六代の尊主たり、みもすそ川の底澄みて、末を受け汲む御流れ、などか捨てさせ給ふべき。

節曲舞　他の人よりはわが人と、誓はせ給ふなる物を、西海の波の立かへり、二たび帝都の雲を踏み、九重の月を眺めんと、深く祈誓申せども、悪逆無道のその積もり、神明仏陀加護もなく、貴賤上下に捨てられ、帝城の外におもむく、なにと成行水無瀬河、山本遠くめぐりきて、昔男の音を泣きし、鬼一口の芥川、弓やなぐゐをたづさへて、駒にまかせて打ち渡る。馴れし都を立出て、いづくに猪名の小條原、一夜仮寝の宿はなし、芦の葉分の月の影、隠れて澄める昆陽の池。生田の小野のおのづから、この河波に浮寝せし、鳥は射ねどもいかなれば、身を限りとは嘆くらん、千山の雨に水まさり、濁れる時は名のみして、さらすかひなき布引の、滝津白波音立てて、雲のいづくを流るらむ、五手船の名残に、五百の舟を作りて、御調を絶えず運びしは、武庫の浦こそ泊りなれ。福原の故郷に着きしかば、人人の家家も、年の三歳に荒れはてて、　上　ふくろう松桂の枝に鳴き、きつね蘭菊の、草むらに隠れ住む、ありし名残もなみ風の、荒磯館住み捨てて、ただ海士の子の住み所、宿も定めぬ旅寝かな。相国の作り置かれし、所所もひきかへ、故宮の軒端月洩り、金玉を交へしよそほひ、花の轅を集めしも、只今のやうに思はれて、昔ぞ恋しかりける。　上　釈迦一代の蔵経、五千よ巻を石に書き、滄海の底に沈めて、一居の島を築きしかば、すせんぞうの船を泊め、風波の難を助けしは、ありかたかりし形見なり、世をうき波の夜の月、沈みし影はかへらず。

指声　かくてあるべきにあらねば、主上を初めたてまつり、みな御船に召されけり。慣らはぬ波の浮き枕、思ひやるこそ悲しけれ、南殿の池の竜頭鷁首の御船ぞと。

曲舞　思びなせども寒江に、釣の翁の棹の歌、まだ聞きなれぬ声声に、沖なる鷗磯千鳥、友呼び連れて立さはぐ、風帆波に遡り、艪声は月を動かす、和田の御崎をめぐれば、海岸遠き松原や、海のみどりに続くらん。須磨の浦にもなりしかば、四方の嵐もはげしくて、関吹き越ゆる音ながら、後の山の夕煙、柴と云物ふすぶるも、見なれぬかたのあはれなり。　上　琴の音に、引き留めらるると詠じける、ごせつの君のこの浦に、心をとめて筑紫船、昔はのぼり今くだる、波路の末ぞ悲しき。かたぶく月の明石潟、六十あまりの秋を経て、問はず語りのいにしへを、思ひやる社ゆかしけれ。ふねより車に乗り移り、暫しここにと思へども、須磨や明石の浦づたひ、源氏の通ひし道なれば、平家のぢんにはいかがとて、又この岸を押し出だす。塩瀬は波も高砂や、尾の上の松のはつ嵐、舟をいづくにかよふらん、室の泊の苫屋形、影は隙洩る夕月夜、遊女のうたふ歌の声、憂き世を渡る一節も、まことにあはれ成けり。慣らはぬ旅は牛窓の、瀬戸の落ち汐心せよ、げに荒けなき武士の、梓の弓の鞆の浦、にぎわふ民のかまどの関、夢路を誘ふ波の音。　上　月落ち烏啼き、霜天にみちてすさまじく、江そんの漁火もほのかに、半夜の鐘のひびきは、客の舟にや通ふらん、ほうそう雨しただりて、知らぬ潮路の楫枕、かたしく袖や萎るらん、荒磯波の夜の月、沈みし影はかへらず。

応安の比より至徳年内の曲舞、已上。白鬚・由良湊・地獄、是は申楽内也。海道下・西国下は、只、琳阿作書として、南阿・観世の曲付也。然共、曲舞の当道えは不出、是も遊楽の曲風のごとし。此外、近年、善光寺・百万の節曲舞、是等は、当世の曲舞にはいえ共、曲舞の性位の本曲をば正して、声懸を和らぐる斗也。私の作書也。為云不及。

六代の歌

是はある御方様より本ぜつあることを序破急に書て進上せよとの御意をもてしるしたる歌なり。

夫世間の無常は旅泊の夕べにあらはれ、有為の転変は草露の風に滅するがごとし是は序分より一歌は闌曲懸也。我一所不住の沙門として、縁にまかせて諸国をめぐれば、名所旧跡おのづから、捨ててまじわる世の中の、夢も現もへだてなく、向去きやく来の境界に至る。

只詞　爰に大和国救世の観世音、霊験殊勝の御事なれば、しばらく参籠し、山寺の致景を見るに。

下哥　山そびへ谷めぐりて、人家雲につらなり、晩鐘雨にひびき来ぬ。

上　川隈も、なを暮れかかる雲の波、なを暮れかかる雲の波、さながら海のごとくにて、ふだらくもかくらくの、初瀬の寺はありがたや。げにや海士小舟、初瀬の山に降る雪と、詠みしもさぞなかく河の、浦の名にある気色哉、浦の名にある気色哉。

只詞　爰にあはれなる事の侯、御堂の西の脇に局しつらひて、女性の籠りて候が、まことに身に思ひありと覚しくて、忍びかねたる言の葉の、色に出で音に立てても、ただ泣くのみなる有様也。

指　ある時女房たちと覚しき人、局を出で、御堂の四面を廻り、千度の歩みを運ぶかと見えし、数も終らざるに、あはただしく局に走り帰り、あさましき御事をこそ聞きてさぶらへ、只今集まり上りたる旅人、駿河の国千本の松原とかやにて、平家の棟梁六代御前、只今斬られさせ給とて、人の集まるを見て候と申を聞きてさぶらふとて、なみだにむせび臥し転びたり。主の女房、さりともとこそ思ひつるに、この子ははや斬られけるかと、声も惜しまず臥し沈み給ふ。さては六代の母にてましましけるよと、その時こそ人も思ひたれ。

上　自是哀傷伝へ聞くこうしは鯉魚に別れて、思ひの火を胸に焚き、はつきよゐは子を先立てて、枕に残る薬を恨む。

下　是みな仁義礼智信の祖師、文道の大祖たり、いはんや末世の衆生と云、しかも女人の心として、恩愛の別を悲しむ事、げにもまことに理なれども、その理も過ぐるばかり、よその袂もうるほへり。ややあて母御前、涙を押さへてのたまふやう、さるにてもこの子は、上人の御助けをこそ頼みしに、其御甲斐もなきやらん、又はまことに斬られなば、さい藤五斎藤六、走りも来り申べきが、ただよそ人の伝にだに、早くも聞ゆるほどなるに、なにとて彼等は遅きやらんと、申しもあへぬ言の葉の、露も心も忘草、なにをか種と思ひ子の、なき世に残る身ぞつらき。

節曲舞　初瀬の鐘の声、つくづく思へ世の中は、諸行無常の理、かりに見えし親子の、夢幻の時の間を、かねてはかくと思へども、まことの別れになる時は、おもひし心も打ち失せて、ただくれくれと絶へかぬる、胸の火は焦れて、身は消ゆる心のみ也。さるにても我が子の、失はれんとしけるとは、聞けどもなをやさりともの、頼みかけまくも、かたじけなくも蔭頼む、南無や大悲の観世音、願はくはもとよりの、御誓願にまかせつつ、ねび、くはん音力刀刃、段段の功力げに、偽らせ給はずは、剣をも折らせて、我が子を助け給へや。　上　かかりける所に、男一人来りつつ、斎藤五参りたると、申せば御母も、いかにいかにとのたまへば、御喜びになりたり、するがの千本にてすでに、斬られさせ給しを、上人其時に、駒を早めて走り下り、喜びの御教書にて、助からせ給ふと、申せば御母も、あまりの事の心にや、嬉しとだにもわきまへず、ただ茫然とあきれつつ、ありがたの事やとて、手をあはせ給ふ袂にも、覚えず落つる涙の、嬉しき袖をだに、干さぬや心なるらん。

慶長三年七月廿一日老父令書写同一校畢

妙庵　玄又判